

戦争が終わって

日本は、大東亜戦争という世界中の人間同士の戦いに参加して、当初はドイツ、イタリアという同盟国もありましたが、残念ながらイタリア脱落、ドイツ、ベルリン陥落、日本だけになって、いよいよ日本民族滅亡という瀬戸際まで追い込まれ、天皇の決断により日本は何とか生き残り、再生することが出来ました。

この戦争に、参加した人は、現在八十歳以上と思いますが、何故こんな無理な戦争をしなければならなかったのか。若い日本男子を何百万と戦場に送り込み、無残な死を遂げさせました。日本兵士は命をかけて祖国を守ったのですが、この戦争はそんな尊い命を犠牲にしてまで戦う意味があったのでしょうか。

そして、どうしても避けられない戦いだったのでしょうか。戦争を始めた理由はいくらでもあったと思いますが、戦争したなら勝たねばなりません。この戦争に勝てる自信は本当にあったのでしょうか。私はいまだに日本軍は無謀な戦いだったと思えてなりません。

私の入隊は西暦一九四三年、四月一日です。この三年四ヶ月の間に、マラリアを発病し、克服するまでの厳しい日々や、無理な戦闘の連続を振り返ると、よく無事に帰還できた和我ながら驚きます。英軍の管理下に入ったのは二十一年一月からでした。英軍下の規律は厳しいと思いましたが、

決して無理のないもので、七月上旬、復員船に乗船するまで私どもに無理な要求はしませんでした。戦争が終わってからは、我々日本兵に人間的且つ理にかなった対応をしてくれました。私どもは、この経験から英国と英国人に対する信頼が生まれ、彼らの紳士的な対応を忘れることはありません。それからもう一つ、どうしても付け加えておきたいことは、負傷兵や病気の兵士に対する日本軍の対応です。彼らを何とか後方の大きな病院へ送ることは出来なかったのでしょうか。前線の病院で何の手当も出来ずに、ただ死を待つだけです。そのまま死んでいった兵士が何人いたことでしょうか。この人たちの三分の二はちゃんと手当てを受ければ助かったことと思います。日本軍が病人専用の船でアキヤブ港より、シンガポール、クワラルンプールの病院まで送ることが出来ていたなら、病死した兵士の五〇六割が助かっていたと思えてなりません。これは、世界の赤十字を通したなら、日本の負傷兵を無事輸送することを英印軍と交渉することができたのではないのでしょうか。私が日本の木造船船でミンビアの病院からタンガップの病院まで送られたとき、甲板の上へ白い服を着た患者を並べていても英軍は攻撃してきませんでした。輸送時間が二十六時間かかって、その間、銃撃されることは無かったのです。しかし私は、ミンビア病院で、だれも乗っていない日本の発動汽船が一撃で沈められたのを見ました。つまり、英軍は紳士的で戦場での規律は守る偉大な国だということです。よって日本軍も病院船でマレーシアのクワラルンプールかシンガポールまで輸送すればかなりの負傷者が救われたと思えるのです。

シンガポールには胸に金モールを付けた日本の高級参謀が大勢いました。その金モールの意味

は、自国の兵士を守るといふ万国共通の役割を担っていたと思いますが、この人達は、実際に日本兵の命をしっかりと守ってくれたのでしょうか。立派な制服に恥じない働きを日本兵に施してくれたのでしょうか。彼らは真の意味での使命を果たしたのでしょうか。

この大きな犠牲を払った戦争を体験した者として何を学ばなければならなかったのでしょうか。私が、三年有餘一兵士として戦争を体験して思うことは、次のようなことです。この戦争で日本は、国力の差があまりにも大きな国を相手に、充分な武器や食糧が無いにもかかわらず、国民を『精神力で戦い抜け』というような愚かなスローガンで扇動した日本軍部には大きな責任があると思います。多大な犠牲を強いられた一億の民と、戦場で散った日本兵士の無念の思いを私どもは忘れることなく、いつまでも慰めねばならないと思います。それが私どもの責任でもあり勤めであると考えます。

同時に私ども人間として、地球人として、新兵器の開発や各国の国防についてしっかりと議論していかねばならないと思います。新兵器の開発にはたくさんのお金がかかります。人間同士の殺戮にそんな無駄なお金を費やしてよいのでしょうか。次々と新兵器を開発するよりも、同じ地球に暮らす人間として、いかに仲良く生きて行くかということを考えるべきだと思います。各国で国防の研究を続けるのではなく、お互い譲歩して国同士、尊重していくことが出来ないのでしょうか。過去の戦争の悲劇を思い起こし、地球上の人類が皆仲良く楽しく暮らしていくことを祈るばかりです。

以上私の拙い文章を最後までお読み頂き、心より感謝申し上げます。

平成二十一年十月吉日

尾崎 宗次郎



平成 21 年 9 月 善通寺にて